

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 25 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530571

研究課題名(和文)利益測定モデルによる会計利益の有用性分析

研究課題名(英文)Accounting income analysis using income measurement model

研究代表者

勝尾 裕子(Katsuo, Yuko)

学習院大学・経済学部・教授

研究者番号：70327310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、会計利益がなぜ投資家の意思決定に有用なのか、その理論的根拠を明らかにすることにある。会計利益の有用性を実証的に検証した結果は数多く示されているが、その理論的根拠については十分な検討は行われていない。本研究では、会計利益の特質の一つである自己創設のれんに着目し、それが利益の有用性に与える影響について、利益測定モデルを用いて考察した。その結果、会計利益における自己創設のれんの認識額とウィンドフォールの認識額とは異なることが示され、IASB概念フレームワークにおける利益概念と認識・測定の基準において矛盾点が含まれることが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This study is to analyze why the accounting income would be useful to investor's decision making. Although shown numerous empirical research, the studies conducted theoretical analysis might be not enough. This study is focused on the self-generated goodwill, which is one of the important characteristics of the accounting income measurement, as to use the income measurement model. The results are (1) the amount of the self-generated goodwill recognized in accounting income and the amount of the windfall recognized there, are different, (2) the criteria for recognition and measurement basis, and the income concept in the IASB conceptual framework are contradictory.

研究分野：財務会計

キーワード：利益概念 自己創設のれん ウィンドフォール 概念フレームワーク

1. 研究開始当初の背景

(1)利益の質の研究

本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけについて、研究開始当初における状況は以下の通りである。

経済的所得の概念との比較から会計利益の特質をとらえようとする利益測定モデルに関する研究は、1950年代から70年代にかけて多くみられたが、その後、利益の質に関する研究が80年代から広まり、会計利益の有用性に関する実証研究については多くの研究成果が蓄積されている。会計利益が発生主義会計を通じて、投資家の将来予測すなわち企業価値予測に役立つプロセスについては、Beaver(1981)による考え方が定説となっているが、Schipper and Vincent(2003)において、会計利益の質をHicks(1946)による経済的所得との近似度とする見解が示されたことによって、経済的所得の概念と会計利益の比較から利益の質を検討する研究が近年では注目されている。

(2)利益の基礎概念に関わる理論研究

利益の質に関して、投資家の意思決定と会計利益の情報価値を問う研究については、実証的な成果は既に数多く蓄積されているが、利益の基礎概念に基づく理論的な見地から会計利益の有用性に関する検討を行った研究については、十分な蓄積はあるとは言えない。

利益の基礎概念について未解決のまま残されている課題は少なくなく、本研究の対象である、自己創設のれんの配分過程に着目した会計利益の特質と、投資家の意思決定における有用性との関係についても、未解決の論点の一つである。本研究では、経済的所得の概念と会計利益の基礎概念に基づき、その中核的な問題である、自己創設のれんに着目して、利益測定の問題について理論的な観点から検討する。

これまで報告者は、利益測定モデルを用いて、自己創設のれんの会計利益における配分額を特定し、会計利益の特質とその有用性の関連を探るため、利益の質との関連について、基盤研究(代表者：慶應義塾大学黒川教授)の共同研究者として研究を行ってきた。そこでは、会計利益に含まれる自己創設のれんの配分額を特定するための利益測定モデルを一般化することについては成功したものの、自己創設のれんの毎期の利益における配分額を特定するには至らなかった。とりわけウィンドフォールが存在する不確実性下における問題については未解決のまま論点が残されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、会計利益がなぜ投資家の意思決定に有用なのか、その理論的根拠を明らかにすることにある。会計利益の有用性を実証的に検証した結果は既に数多く示され

ているが、その有用性に関する理論的根拠については必ずしも明らかにされていない。本研究では、会計利益の特質の一つである自己創設のれんに着目し、それが利益の有用性に与える影響について利益測定モデルを用いて理論的に考察する。

具体的には、会計利益の構成要素である自己創設のれんの配分額と利益の質との関連を考察し、なぜ会計利益が投資家の意思決定に有用なのかについて、その理論的根拠を探るとともに、自己創設のれんが財務報告から排除されてきた理由を検討する。

3. 研究の方法

(1)利益測定モデルの精緻化

会計利益に含まれる自己創設のれんの配分額について、利益測定モデル(Edward and Bell, 1961)を用いて特定するプロセスを精緻化する。精緻化の内容としては、不確実性下におけるウィンドフォールが存在するケースや、配当額の変動するケースを検討し、これらの変数を考慮した場合に、結果がどのように影響するのかを検討する。精緻化された利益測定モデルに基づき、不確実性下におけるウィンドフォールの配分過程と自己創設のれんの配分過程を比較し、そこで得られる結果から、会計利益の特質について検討を加える。

(2)「概念フレームワーク」の検討

利益測定モデルにおけるウィンドフォールと自己創設のれんのそれぞれの配分過程の分析から明らかにされた、会計利益の基礎概念に基づき、近年とりわけ問題となっているIASB概念フレームワークにおける利益概念について、その問題点を指摘するとともに、認識と測定に関する基準の問題点についても検討する。

4. 研究成果

(1)配当の存在が想定される場合の自己創設のれんの配分について

会計利益における期間配分の計算構造について論じたLee(1965)、Solomons(1950)等に基づき、Edwards and Bell(1961)における利益測定モデルを用いて、配当額が変動する場合において、会計利益に含まれる自己創設のれんの配分額が変動するか否かについて、分析を行った。

具体的には、Edwards and Bell(1961)における利益測定モデルを、より一般化したモデルに展開したうえで、配当額が変動する場合に、将来キャッシュフローの現在価値と時価との差額で定義される自己創設のれんの額がどれだけ変動するかを分析した。そのうえで、そこで得られた結果に基づき、それぞれの場合において、会計利益に含まれる自己創設のれんの認識分の大きさが変動するかどうかを検討した。その結果、配当額が大きくなることによって、毎期の会計利益に含まれる自己創

設のれんの大きさが影響されることはない、すなわち、のれんの配分過程は配当額の大きさに影響されることはない、という結果を得ることができた。

(2) ウィンドフォールと自己創設のれんの関係について

ウィンドフォールの存在する不確実性下において、会計利益におけるウィンドフォールの認識過程と自己創設のれんの認識過程の比較を行い、両者に相違点があるか否かを検討した。

具体的には、Hicks(1946)における経済的所得の概念を変動所得概念に拡張したAlexander(1950)、斎藤(2007)等により明らかにされた、会計利益におけるウィンドフォールの認識過程に基づき、これと自己創設のれんの認識過程との比較を行った。Alexander(1950)および斎藤(2007)等によれば、経済的所得概念では除かれるべきとされているウィンドフォールについて、いずれかの期間で認識するとした場合にどのように認識されるのか、その認識基準ないし認識過程が、Alexander(1950)における変動所得に基づき示唆されている。

そこでは、変動所得の概念を用いることにより、ウィンドフォールが、何らかのキャッシュに変換されたときにその実現分が利益に認識される、という仕組みが説明されている。この仕組みは、会計利益の計算に置き換えれば、いわゆるリサイクリング、すなわちその他包括利益から純利益への組み換えに相当するものである。不確実性下のウィンドフォールの認識過程を明らかにすることにより、経済的所得概念における考え方と、会計利益におけるリサイクリングの方法を整合的に説明することが可能であることが示されている。

これらの経済的所得と会計利益のウィンドフォールの認識過程とリサイクリングに関する先行研究においては、不確実性下におけるウィンドフォールに議論が絞られており、会計利益の特質の重要な一つである、自己創設のれんの認識過程に関する分析については、検討対象とされていない。そのため、本研究では、不確実性下の自己創設のれんに関する問題に着目し、会計利益におけるその認識過程について、利益測定モデルを用いて検討を行った。

具体的には、Edwards and Bell(1961)における利益測定モデルを一般化したうえで、確実性下の条件から不確実性下の条件へ拡張し、ウィンドフォールが存在するケースにおける、自己創設のれんの配分過程について検証した。

まず、先行研究において用いられているウィンドフォールの実現分と未実現分を区分する判断基準と同様の基準を用いて、自己創設のれんについて実現分と未実現分を区分したうえで、会計利益に認識されている自己

創設のれんの額が、実現分と未実現分のどの部分に相当するのかを検討した。その結果、会計利益に含まれている自己創設のれんの額は、必ずしもその実現分と一致するわけではないことが明らかになった。この結果は、会計利益には自己創設のれんの実現分が認識されているわけではない、ということの意味する。

自己創設のれんの実現分の全額が会計利益において認識されているわけではないということは、ウィンドフォールについては会計利益に実現分に相当する額が計上されるのに対して、自己創設のれんについては実現分に相当する額が利益に計上されているわけではないことを意味する。これは、会計利益に含まれる自己創設のれんの額が、会計利益に含まれるウィンドフォールの額と一致しないだけでなく、自己創設のれんの実現分と会計利益に含まれる自己創設のれんの認識分とは異なるということでもある。すなわち、ウィンドフォールの実現分を会計利益に認識することを優先させることで、自己創設のれんについては実現分とは異なる額が、会計利益に計上されているという結果が得られた。

(3) 「概念フレームワーク」における利益概念について

会計利益における自己創設のれんの配分過程を明らかにすることによって、会計利益の特質の一部を示すことができた。この結果に基づき、そうした特質を有する会計利益の概念と、「概念フレームワーク」における利益概念が、どのような点で類似し、また異なるのか、IASB 概念フレームワークを題材に検討を行った。

IASB 概念フレームワークについては、この数年で大幅な改定作業が進められており、2015年5月にはExposure Draft(以下、IASB ED)が公表されている。このIASB EDにおいては、企業会計の目的として投資家の意思決定有用性が挙げられ、その目的のために最も主要な情報は利益情報であると指摘されている。しかし、その利益については定義しないまま、認識・測定の規定が定められるという構造になっており、様々な問題を抱えていると言わざるを得ない。

本研究では、IASB EDの問題点について、会計利益の基礎概念に照らして理論的な観点から検討を行った。まず、企業会計の目的と利益概念の関係についての矛盾点を指摘し、そのうえで、IASB EDにおける利益概念と測定基礎の選択に関するルールが整合しない点を含んでいること、またリサイクリングの規定に曖昧な点が残ることを指摘している。

測定基礎の選択の問題については、dual measurementの方法におけるビジネスモデルの使い分けの考え方は、純利益概念における測定基礎の考え方と整合する内容を含む一

方、整合しない一面も有することを明らかにした。すなわち、質的特性の一つである測定の不確実性という概念を導入したことにより、ビジネスモデルの使い分けによる結果と相反する場合においても公正価値評価が適用される可能性が排除されず、その結果、測定基礎の選択と投資の目的との関係に対して、公正価値評価が優先される結果となっている。

この測定基礎の選択基準に関する問題点は、その他の包括利益から純利益への組み換え、すなわちリサイクリングの判断基準の規定においても、同様の問題をもたらしている。すなわち、測定の不確実性が排除された時点で目的適合性が高まったと判断されて、リサイクリングを行うべきであると判断されるケースが排除されず、そこでは目的適合性という概念が濫用される可能性が示唆されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

勝尾裕子、「測定の不確実性と目的適合性 - IASB 概念フレームワークにおける質的特性」、『産業経理』、査読無、第75巻、第4巻、pp.71-80、2016年1月。

Yuko Katsuo, Bea Chiang and Al Pelham, 'Environmental Costs, Social Responsibility and Corporate Financial Performance - A Closer Examination of Japanese Companies,' *American Journal of Business Research*, 査読有, Vol.8, No.1, pp.39-52, Nov. 2015.

勝尾裕子、「IASB 概念フレームワークにおける利益概念」、『企業会計』、査読無、第67巻、第9号、51-60頁、2015年9月。

Van Mourik, Carien and Yuko Katsuo, 'The IASB and ASBJ Conceptual Frameworks: Same Objective, Different Financial Performance Concepts,' *Accounting Horizons*, 査読有, Vol.29, No.1, pp.199-216, Mar. 2015.

[学会発表](計12件)

Yuko Katsuo, The 11th Workshop on European Financial Reporting, 'The Concept of Net income and Comprehensive Income - Consistency between Windfall and Subjective Goodwill,' 4th Sep. 2015, Paris,

France.

Yuko Katsuo, American Accounting Association Annual Meeting 2015, 'Consistency Between the Recognition of Windfall, Subjective Goodwill, and the Concept of Income,' 10th Aug. 2015, Chicago, USA.

Yuko Katsuo, European Accounting Association, 38th Annual Meeting 2015, 'Consistency between the Recognition of Windfall, Subjective Goodwill, and the Concept of Income,' 30th Apr. 2015, Glasgow, U.K.

Yuko Katsuo, The British Accounting and Finance Association 2015 Annual Meeting, 'Consistency between the Recognition of Windfall, Subjective Goodwill, and the Concept of Income,' 24th Mar. 2015, Manchester, U.K.

Yuko Katsuo, Bea Chiang and Al Pelham, American Institute of Higher Education, 2014 Conference, 'Environmental Costs, Social Responsibility and Corporate Financial Performance - A Closer Examination of Japanese Environmental Accounting,' 1st Nov. 2014, Arlington, USA.

勝尾裕子、日本会計研究学会全国大会、「自己創設のれんの認識とウィンドフォール」、2014年9月5日、横浜国立大学、日本。

Yuko Katsuo, Bea Chiang and Al Pelham, American Accounting Association, 2014 Annual Meeting, 'Environmental Costs, Social Responsibility and Corporate Financial Performance - A Closer Examination of Japanese Environmental Accounting Environmental Costs, Social Responsibility and Corporate Financial Performance', 6th Aug. 2014, Atlanta, USA.

Yuko Katsuo, Bea Chiang and Al Pelham, American Accounting Association 2014 Mid-Atlantic Region Meeting, 'Environmental Costs, Social Responsibility and Corporate Financial Performance - A Closer Examination of Japanese Environmental Accounting', 25th Apr. 2014, King of Prussia, Pennsylvania, USA.

Van Mourik, Carien and Yuko Katsuo, American Accounting Association 2012

Annual Meeting, 'Performance Measurement and Income Concepts in the IASB and ASBJ Conceptual Frameworks,' 6th Aug. 2012, Washington D.C., USA.

Van Mourik, Carien and Yuko Katsuo, The 35th Annual Congress of the European Accounting Association, 'Performance Measurement and Income Concepts in the IASB and ASBJ Conceptual Frameworks,' 10th May 2012, Ljubljana, Slovenia.

Van Mourik, Carien and Yuko Katsuo, The 9th Workshop on European Financial Reporting, 'IASB and ASBJ Conceptual Frameworks: Same Objective, Different Financial Performance Concepts', 5th Sep. 2013, Valencia, Spain.

Van Mourik, Carien, 勝尾裕子, 日本会計研究学会全国大会, 'Performance Measurement and Income Concepts in the IASB and ASBJ Conceptual Frameworks,' 2012年9月1日, 一橋大学、日本.

〔図書〕(計2件)

勝尾裕子,「IFRSと概念フレームワーク」, 『別冊企業会計』, 中央経済社, 共著(編著者:伊藤邦雄), pp.28-37, 2013年11月.

勝尾裕子,「自己創設のれんの認識 -1900年前後の議論を中心として」, 『会計基準研究の原点』, 共著(編著者:大日方隆), 中央経済社, 397頁, pp.59-76, 2012年6月.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝尾裕子 (KATSUO, Yuko)
学習院大学・経済学部・教授
研究者番号: 70327310